

眼鏡

小川未明

青空文庫

かず子さんが、見せてくれた紅い貝は、なんという美しい色をしていたでしょう。また、紫ばんだ青い貝も、海の色が、そのまま染まったような、めったに見たことのないものでありました。

「ねえやが、お嫁にいくので、お家へ帰ったのよ。そして、私に送ってくれたのよ。図画の先生が、ほしいとおっしゃったから、私いくつもあげたわ。」と、かず子さんが、いました。正吉は自分もほしいと思っただけで、おくれと口に出してはいりませんでした。かえって、反対に、

「なあんだい、もつと、もつと、きれいなものをかず子ちゃんは、知っていないだろう？」と、いったのです。かず子さんは、ほんやりと、正吉の顔をながめて、

「もつときれいなものつて、貝？ 石？ 正ちゃんは、持っているの。」と、ききました。「持っていないけど、あるよ。」

「ありやしないわ。」

「あるから。」

「じゃ、見せてよ。」と、かず子さんは、いいました。

正吉は、ただ、なんでも悪口をいつてみたかったです。なぜなら、自分の家にいた女中のしげは、お嫁の話どころでなく、いつも欲深げな父親がたずねてきては、外へ呼び出して、おしげが働いてもらったお金を、みんな取り上げていつてしまった末に、無理におしげをよそへやつてしまったのでした。それを考えると、だれにもいうことなく、腹が立つのであります。

「悪口をいうから、正ちゃんにはあげないわ。」

「いるもんか、かず子ちゃんは、もつと、もつと、きれいなものがあるのを知らないだろう。」

このとき、正吉は、ほんとうにきれいなものがあるのを思い出したのです。それで、ほくほくしていると、

「ああわかった、正ちゃん、お花でしよう?」

「花なもんか。」

「正ちゃんの知っているもの?」

「うん、そうだよ。」

「ありやしないわ。」

かず子ちゃんは、勝ち誇ったように、片足を上げて、トン、トンと跳ねました。

「じゃ、きてごらんよ。」

正吉は先に立つて、くさむらの中へ入りました。木にからんだ、からすうりの葉に止まっている、うす赤い蛾を捕らえました。

「ほら、かず子ちゃんの貝より、もつときれいだろう。」

生きている蛾のほうが、貝がらよりもきれいでありました。けれど、かず子さんは、気味悪がつて、その蛾を取ろうとしませんでした。

「ほんとうに、きれいだわね。ついている白い粉、毒でしょう。」

「あとで、手を洗うからいいよ。数珠玉だって、この青い貝よりきれいだぜ。」

「やつぱり、私、貝がらのほうがいいわ。だって、海にあるんですもの。」

海ときいて、正吉は、だまって、考え込んでいました。

「正ちゃん、なにしてんだい。」

そこへ、義雄くんがやってきました。義雄は、小さな空きかんを握っていました。

「みみずを取りにきたの？」と、正吉しょうきちが、きくと、彼かれは、頭あたまが横よこに振ふつて、
君きみ、がまがえるを見みない。「といいました。

「ひきがえるなら、私わたしの家うちのお庭にわにいてよ。」と、かず子こさんが、いいました。

「いまいる？」

「雨あめが降ふると、出でてくるわ。」

「なあんだ、そんなんじや、しかたがないよ。」

「がまがえる、どうするんだい。」と、正吉しょうきちがききました。しかし、義雄よしおは、きかぬ
ふりをして、

「正ちゃん、僕ぼく、よく釣つれるところをきいたから、こんどの日曜にちようにゆかない。」と、話はなし
をそらしました。

「義雄よしおさん、ほんとう、つれていってくれる？」

正吉しょうきちは、目めをまるくして、義雄よしおを見みました。義雄よしおは、うなずきました。

「どつかに、がまはいないかなあ。かたつむりでもいいんだけど。」

釣つりにつれていってくれるといったので、正吉しょうきちは、もう有頂天うちようてんでした。

「かたつむりでもいいの、かたつむりなら、僕ぼく、さがしてあげるよ。」

正 吉は、くさむらの中を潜って、かけずりました。そして、義雄が、まだ一ぴきも見つけないうちに、正 吉は、三びきも見つけて、義雄に与えました。

「これだけあれば、いいよ。」

「義雄さん、飼っておくのと、正 吉は、ききました。

「学校へ持って行って、理科の時間に解剖するのだよ。」

「えっ、殺してしまうの？」

正 吉は、ぞつとしました。それなら、捕まえてやるのではなかったと思つたが、もうおそかつたのです。心の中が、急に暗くなりました。そして、なにもかも、おもしろくなくなつたのです。

「かわいいそうだなあ。」

やった、かたつむりを取り返す、いい智慧が浮かんできませんでした。

「毒びんの中に入れると、苦しまなくて、死んでしまうのだよ。」と、義雄は、心配する必要はないと、いいました。けれど、正 吉には、命を取るといふことが問題なのです。義雄は、びんの中へ、草の葉も入れて持ってゆきました。いつのまにか、かず子さんはいなくなりました。正 吉だけ、いつまでも自分のしたことを後悔していまし

た。

二一

学校で、正吉は、とりわけ青木、小田とは仲よしでした。三人は、昼の休み時間に、運動場へ出て、木かげのところで話をしていました。

「僕、このあいだ、教室へいったら、ねずみの奴、机の上でパンくずを食べていたのさ。両手でこんなふうにはパンを持って、それはかわいらしかったよ。すぐ足音で逃げました。見たら机の上に、糞が二つ落ちていた。は、は、は。」と、青木が、いいました。正吉は、なんだか、そのねずみのようすが目に見えるような気がして、おかしかったので、

「小さいねずみ？」と、きいてみました。

「ああ、まだ子供なんだね。壁の下に穴があいているだろう、あそこから、出たり、入ったりするのだよ。」

「早く、穴をふさいでしまつたらおもしろいね。」

「二人では、できないな。」

三人は、いずれも動物が好きなので、目を細くして笑いました。ことに近眼の青木は、顔を上げて、眼鏡を光らしながら、そのときのおかしさを思い出したように、

「いま、いったら、いるかもしれないよ。」といいますと、

「いつてみようか。」と、正吉も、小田も、たちまち同意しました。

三人は、肩を組み合つて、口笛で、

千里の山坂をつかの間に

過ぎゆく旅路のおもしろや

と、うたいながら、はじめはゆるい歩調で駆けていきましたが、途中から、小田が、ひとり大急ぎで、窓の下の方へ向かつて走り出しました。なにか落ちていたのです。

「ああ、すずめの巣だ！」

こう叫んで、つぎに正吉が、駆け出しました。このとき、たくさんのすずめが大騒ぎして鳴いている声が耳に入りました。小田が拾った巣をのぞくと、一羽の子すずめが入っていました。高い屋根の軒端にかかっているのが落ちたらしい。親すずめは、三人の立っている頭の上を、心配して往つたり、きたりしました。白く乾いた土の上へ飛ぶ

影かげが落ちました。

「かわいそうだけど、あんな高いところへ、上あがれないね。」

「僕ぼく、飼かつてやろうかな。」と、小田おだが、いいました。

「ああ、そのほうがいいよ。」

「巢すもいっしょに、かごの中なかへ入れておくといいね。」

二人ふたりは、小田おだに、そうすることをすすめました。いつしか、ねずみのことなど忘れてし

まいりました。小田おだは、自分じぶんの帽子ぼうしの中なかへすすめの巢すを入れて、三人にんは、教室きょうしつへ入はいると、

帰かえるまで、どうしておくかということとを相談そうだんしました。このとき、カチンとやって、ド

アの開あく音おとがしたので、三人にんは、振り向むくと、監護当番かんごとうばんの赤あかい印しるしを胸むねにつけた、六年ねんせ

生いが二人ふたりこちらを見守みまもっていました。

「君きみたち、お教室きょうしつでなにをしているの？」と、一人ひとりが、たずねました。

「なにもしていない。ちよつと用事ようじがあつたんだよ。」と、正しょう吉きちが答こたえました。

「持もっているのは、なに？」

「すずめの子こをつかまえたんだよ。」と、小田おだが、いいました。すると、二人ふたりの六年生ねんせい

は、そばへやってきました。

「見せて。」といつて、一人は、帽子の中からすずめの巢を取り出しました。子すずめは、ふるえて、空の方を見上げて、チュツ、チュツと鳴き声をたてていました。それを聞いて、親すずめが窓のあたりで、また、チュツ、チュツと鳴いていました。

「かわいそうだから、早くここへ入れて。」と、小田が、帽子を差し出すと、六年生の小西は、そのまま、すずめの巢を、あちらへ持つてゆこうとしました。

「だめだよ。」と、小田が、怒りました。

「すずめなんか、お教室へ持つてきては、いけないのだろう。」

二人の六年生は、いうことをきかずに、すずめを取りあげて、いこうとしました。

「失敬じゃないか。」と、小田が、真つ先になつて、その後を追いました。

「およしよ！」と、正吉も、叫びました。

「このすずめ、僕たちにおくれよ。先生にあげるのだから、僕たち、理科の時間に、解剖をしてもらうんだよ。」と、小西が、答えました。

正吉は、解剖ときくと、ぞつとしました。義雄さんに、頼まれて、なにも知らずに、かたつむりを捕つてやったことが後悔されるばかりでなく、そのときのことを思い出すと、いまでも腹が立つので、

「いけないよ、そんなことをしちや。」と、大きな声で、叫びました。

「解剖するなら、君たち、かつてにすずめを捕つたらいいだろう。」と、青木もいきました。

すると、二人は、そのまま逃げるようすをしましたから、三人は、やらせまいとして、廊下で道をさえぎって、争い合いました。争いの最中に、小西のひじが、青木の顔に当たると、眼鏡が飛びました。

「おい、騒いじやいかん、なんで、運動場へ出ないんだね。」

こういって、止めたものがあります。みんなが、びっくりして見ると、髪を長くして、赤いネクタイをした、図画の先生でありました。先生は小使い室へ用事があるので、教員室を出て、ちようど通りかかったのです。

「先生、こんなすずめの巢をお教室へ持って入るのです。」と、六年の山本が、告げました。

「先生、教室で遊んでいたのではないのです。帰りに持って帰ろうと置きにきたのです。」と、小田が、弁解しました。

図画の先生は、両方の言い分をきいていられたが、

「そんなものを、教室へ持つて入つては、いけないな。」と、おっしやいました。六年生は、それ見ろといわぬばかりの顔つきをしました。

「先生、僕たちの拾つたすずめを、だまつて持つていこうとするから、いけないのです。」と、青木が、六年生の行為を非難しました。

先生はこうなると六年生をいいとはいえませんでした。しばらく、先生は黙つていられると、六年の山本が、

「吉村先生にあげて、理科の時間に、解剖していただくと思つたのです。」と、答えました。

「解剖！」と、若い図画の先生の目は光つて、山本の顔を見られました。

「そうです。僕たち、このごろ、いろいろのものを解剖して、習つていのです。吉

村先生は、へびでも、小鳥でも、捕らえたら持つてこいとおっしゃつたのです。」と、すずめを持つている小西が、いいました。

正吉は、このとき、いい知れぬ腹立たしさがこみ上げてきました。

「僕たち屋根からおつこちたすずめを助けてやろうと思つていのに殺すなんて、そんなことできません。解剖したかつたら、自分で取つてくればいいのです。」

正吉は、こういいました。しず子さんが、美しい貝をあげた先生は、この先生だと思つと自分のいつたことをわかつてくださるにちがいないと思ひました。

図画の先生は、目をぼちぼちさして、どちらにも理屈があるので、判断に苦しむといつたようすでしたが、窓ぎわへきて、子を案じて鳴いている親すずめの鳴き声が耳に入ると、急に先生の顔色が明るくなりました。

「君たちのいうことは、よくわかつた。一方は、理科の知識を得るためだというのだし、一方はかわいいそうだから助けるといふのだ。どちらも悪いとはいわれませんが、いちばんいいのは、この子すずめを親すずめに返してやるんだね。」と、先生はおつしやいました。

「ああ、それがいいのだ。」と、正吉は、思ひました。

「先生、あの高い屋根へどうして上がれますか！」

小田が、先生の言葉の終わるのを待つて、問ひました。

「あすこへは上がれませんね。しかたがないから、物置の軒下へでも小使いさんに頼んで入れてもらうのだ。そうすれば、親すずめがきて、世話をするでしょう。」と、先生は、おつしやいました。

「やはり、それがいい。」と、青木も、小田も、賛成しました。六年生の二人は、反

対しなかつたが、だまつていました。

「それでいいなら、私が、小使いさんに頼んであげるから。」

「先生、お願いいたします。」と、四年生の三人は、声をそろえて叫びました。

「先生、お願いいたします。」と、四年生の三人は、声をそろえて叫びました。図画の先生は、すずめの巢を大事そうに持つて、はいつている子すずめを慰むるようにして、あちらへいつてしまわれました。

これで、とにかく、ひとまず事件が終つてしまつたので、六年生の二人も、あちらへ去ろうとしました。すると、突然、青木が、

「君、僕の眼鏡をわつたね。」と、青い顔をして、六年の小西を呼びとめました。みんなは、驚いて、その方を見ました。

「僕が、君の眼鏡をわつたつて！」

小西は、青木の差し出した眼鏡を見つめました。なるほど、片方の玉に白いひびが入つています。

「君のひじが当つて、眼鏡が飛んだんだよ。」と、青木が、説明しました。そういわれると、小西も、「ああ、あのときか。」と、思つたのでありましょう。じつと眼鏡を見ていましたか、

「知らんでしたのだから、かんにんしてね。」と、素直に、わびました。

こうわびられると、かえって、青木が返事に窮してしまいました。それは、なぜでしょう？ みんなの視線が彼の顔を見守ると、さもいいにくそうにして、

「僕は、いいけれど、お母さんが……。」と、いいよごみました。

「しかられるの。」と、小西が、きき返しました。青木は、うなずきました。

青木の家は、荒物屋で、父親はどうになくなって、母親と二人でさびしく暮らしているのです。その家のことをよく知っている、正吉や、小田には、むしろ、青木の立場に同情されたのであります。そして、すずめの巢よりも、このほうが、問題に思われました。

「お家へいって、あやまれればいいだろう。」と、正吉がいました。

「家へいって、あやまらなくても、半分弁償すればいいだろう。」と山本は、小西に味方して、いいました。

しばらく、だまって考えていた小西は、

「君、お母さんにしかられるようなら、僕、弁償するよ。」

こういったとき、ちょうどベルが鳴ったので、六年生の二人は自分たちの教室の

方へ、走つていきました。

三

青木は、小西が、あやまりにきてくれなかつたので、わつた眼鏡の球代を半分、弁償してもらふことにしました。そして、このことを正吉と小田に話すと、二人ともいつしよにいこうといつてくれました。

「眼鏡屋の受取証を忘れずに、持つてゆくんだぜ。」と、小田が、注意しました。正吉は、学校から帰ると、道順から、青木と小田の誘いにくるのを待つ間、金魚の水を換えたりしていました。やがて、外で二人の声がしたので、正吉は、家を出たのであります。

小田が、小西の家を知つていふので、ほかの二人は、ついていきました。さるすべりの咲いている家の垣根について曲がると、お湯屋がありました。その付近には、小さな商店が、かたまつていましたが、小西の家は、その中の青物屋でありました。こちらから見ると、なすや、きゅうりや、大根などが、店先にならべられて、午後の赤

色をした日の光を受けていました。

小西は、もう学校から帰って、家のでつだいをしていました。貧しげなようすから見ても、正吉は、なんだか、金を出させるのは、かわいそうな気がしました。

三人は、小西が、こちらを向いてくれるのを待っていました。なかなか向きそうもありませんので、

「小西くん！」と、ついに、小田が、小さな声で呼んだのであります。きこえたとみえて、小西は、じつとこちらを見ました。そして、にっこり笑うと、彼の姿は、奥へ消えて見えなくなりました。

「どうしたんだらうね。」

「いま、出てくるよ。」

こんなことを話しているところへ、小西が走ってきました。青木は、小西に向かって、「君、半分弁償してくれない？」といいました。

「いくらなの？」と、小西は、ききました。

青木は、上衣のポケットから、眼鏡屋の受取証は出して渡しました。

「家まで、きてくれない。」

三人は、小西のあとについてゆきました。店の次の間では、小西の父親らしい人が、肌脱ぎで、若い男を相手にして、将棋をさしていました。小西が、受取証を父親に見せると、父親は、しばらくだまって考え込んでいました。将棋の相手をしている若い男が、「どうしたんだ？」と、のぞき込みました。父親は、説明しているらしかったのです。すると、その若い男は、なにか小さな声で、理屈をいつているらしかったが、たちまち、三人のいる方へ顔を向けて、

「みんなが騒いで、わつたのだから、みんなで弁償するのがあたりまえでしょう。一人に半分出させる法はないだろう。」と、おどすような口調で、いいました。三人は、思いがけない反対に出あつて、たがいに顔を見合わせました。

「子供だと思つて、ばかにしている。」と、小田がつぶやきました。

このとき、正吉は、その男をにらんで、

「いくら、おおぜいが騒いでも、眼鏡を飛ばさなければ、われなかつたんだろう。」と、いくらか、せき込んで答えました。これに對して、若い男が、なにかいおうとすると、「自転車屋のおじさん、いいんだよ。」と、小西は、むりに男を押さえました。そして、三人を引つ張るようにして、湯屋の前のすこしばかりの空き地へきました。

「きつと、あげるよ。今月の末まで、待つてくれない？ 僕、新聞を配達しているのだから、お金をもらつたら、すぐ持つていくよ。」
「そういつた、小西の顔色にも、言葉にも、真実があらわれていました。」

「ああ、いつでもいいんだ。」

青木は、こう答えました。彼は、小西の境遇に同情したばかりでなく、むしろ、感心な少年だと心を打たれたのです。正吉も、小田も感じたことは、同じでありました。

三人は、また、もときた道を帰りました。最後まで、黙っていた父親や、おどそうとした若い男の顔は、三人の目にいつまでも残っていて、不快な感じがしたけれど、小西からは、まったくそれと反対な、快い印象を受けただけであります。自分たちの世界は、別だと考えたのは、ひとり正吉だけではなかつたのです。いま、小西に対して感ずるものは、友愛の情よりほかにありませんでした。

「あつ、渡り鳥が！」と、小田が、大空を指しました。はるかに、空をたがいにいたわりながら、遠く旅をする鳥の影が見られました。

三人は無限の感慨で、見えなくなるまで、いつしよに、その鳥の影を見送っていたの

であります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「お話の木」

1937（昭和12）年9月

※表題は底本では、「眼鏡《めがね》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

眼鏡

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>